

第9回木更津市立小中学校適正規模等審議会会議録

○開催日時：平成22年10月4日（月）

午後1時30分から午後4時00分まで

○開催場所：木更津市役所6階会議室

○出席者氏名

審議会委員：佐伯康子、内田慎一郎、川名和夫、青柳敬子、石井徳亮、
坂井麻貴子、池田利一、金子邦夫、山口嘉男、加藤淳、
石渡宏

教育委員会：初谷教育長、鶴岡教育部長、石井教育部次長
（教育総務課）宮澤副課長、齊藤副主幹
（事務局 学校教育課）高澤参事、浪久副課長、安見主査、
鶴岡主査

○議題等及び公開非公開の別

議事 (1)適正配置に向けての学校ごとの方策について：公開

○傍聴人の数 4人

1 開会（佐伯会長）

ただいまから第9回木更津市立小中学校適正規模等審議会を開催します。

2 会長あいさつ

佐伯会長 本日は第9回目の審議会となります。

前回はとても暑いなか、視察をしていただきました。この提案をされた金子委員、いかがでしたか。

金子委員 視察の願いを聞いていただきありがとうございました。

周辺部の学校でしたが、環境のよい学校がありまして、先生方、地域の皆さんの努力というものも見えて、色々配慮されていて、子どもたちが大切にされているのだなという印象を深く受けました。

特に、富岡小は日本のふるさとの学校という感じでした。

ありがとうございました。

佐伯会長 視察も踏まえまして、本日は金田、中郷、鎌足中学校区の適正配置を考えていきたいと思っています。よろしくお願いします。

3 教育長あいさつ

こんにちは。大変お忙しいなかお集まりをいただきまして、ありがとうございます。

会長からお話がありましたように、今回は、前回現地視察をしていただいた学校に焦点をあてての審議となります。

金田小学校は、8月の視察のときから耐震補強工事がだいぶ進んでいて、囲いをして、補強の鉄骨も入っている状況です。今年はそのような工事が祇園小学校、高柳小学校、馬来田小学校の一部で進んでいます。

また、木更津第三中学校の新築、馬来田小学校の一部新築、八幡台小学校・太田中学校の増設といった工事が、数多く進んでいます。

9月の議会では、審議会の進行状況や、課題、今後の進め方等についてご質問をいただいております。

今日の会議にも多数の傍聴の方がお見えのようで、市民をはじめ議会でも関心が高い審議会ですので、よろしくご審議をお願いします。

— 資料確認 —

- ・シミュレーションデータ
- ・金田地区区画整理事業概要についてのパンフレット

3 議 事

佐伯会長 それでは、本日の議題に入ります。

適正配置に向けての学校ごとの方策についてです。

第7回の審議会で岩根地区を審議してから、少し時間が経っていますので、適正配置の基本的な考え方を確認しておきますと、中間答申の31ページに記載してありますように、適正規模を確保すること、地域特性に配慮すること、児童生徒数の将来推計を考慮すること、通学距離を考慮すること、通学の安全性を確保すること、施設の現状を考慮すること、指導体制をはじめとする学校教育環境を考慮すること、そして、一つの小学校から一つの中学校へ進学することを重要視していくことでした。

石渡委員 今年度は最終答申をまとめるということで、教育都市きさらづという言葉があるのですが、教育長からこの教育都市きさらづということがどういう構想であるのかということ詳しくお聞きしていません。この会は、適正規模適正配置の審議会ですが、どのような教育都市構想をもとにこういった審議を展開しているのかということ、まとめの年度にあたってお聞きして、そういうことも答申のなかにあげるべきではないかと思えます。

初谷教育長 教育都市きさらづというと、多分委員の方々は教育の内容を学校教育とお考えだと思いますが、教育委員会が考える教育は、学校教育と、生涯学習を含めた社会教育があります。

木更津は、教育財産の蓄積が大変豊富です。人、文化、歴史はもちろんですが、木更津市内にある大学、高専、私立を含めた高等学校、DNA研究所など、中等高等教育研究機関の集積がたいへん進んでいるところです。そういった地の利を生かして、社会教育、学校教育、バランスのとれた教育施策を展開していきたいと考えています。

特に学校については、教育格差を生じさせない、全ての子どもに行き届

いた教育を保障していくために、様々な施策を展開していきます。キャッチフレーズとしては、トライアングル子育てというのがありまして、これは木更津市だけが言っているわけではありませんけれども、学校教育というのは、学校だけで完結するものではなく、子どもたちを健全に賢く育てていくためには、学校はもちろんですけれども、家庭、地域と連携をとって、みんなが力を合わせていかなければいけないということで、学校支援ボランティア制度、学校評議員の制度をいち早く取り入れまして、開かれた学校づくりを目指しています。それに加えて、木更津市独自の学校評価のシステムを作りあげましたので、学校評議員のお力を借りて、内部評価だけではなく、第三者評価に近い客観評価を取り入れながら学校経営を進めています。

ソフト的な事業としましては、算数数学検定や、スクールサポートティーチャーの市独自の配置、読書相談員の充実など、きめ細かな教育が31校に行き渡るように努力をしています。

石渡委員 木更津市が先進的な教育を進めていることがよく分かりました。

私見ですが、木更津には文化遺産もたくさんあると思います。太田山の日本武尊の像など、日本書紀の中に書かれているというのはそんなになことだと思えます。ですから例えば、教育都市というのを文教都市として広く地域全体の教育を文化と絡めて発展させていくということもあるのではないかと思います。

佐伯会長 それでは、学校ごとの方策に入ります。

これから審議する学校は、全て小規模校です。小規模校に対する適正配置の方策を確認しますと、中間答申の32ページに記載しましたように、隣接する学校との通学区域の変更、児童生徒数の将来推計によっては隣接校との統廃合、学校予定地等への移転があります。

これから審議する学校の学区には、学校予定地はありませんので、考えられる方策としては、隣接校との通学区域の変更や統廃合になります。

これらの視点から、前回の視察の順に検討していきたいと思えます。

金田中学校区から考えていきたいと思えます。

まず、金田小学校、金田中学校の沿革などについて、事務局で把握している範囲で説明してください。

浪久副課長 金田地区、及び金田小中学校の沿革につきまして説明します。

金田地区は、明治22年、畔戸村、瓜倉村、中嶋村及び牛込村が合併し、その際金田小学校が設置されました。その後、昭和22年、新学制施行によりまして金田村立金田小学校となり、金田村立金田中学校が設置されました。昭和30年、木更津市と金田村が合併し、木更津市立金田小学校及び金田中学校となり、校舎や施設の整備拡充や様々な教育活動を経て、地域にとってのコミュニティの場として重要な役割を果たしながら、現在に至っております。

佐伯会長 金田小学校と中学校の現状と課題を整理したときに、現在金田東・西土地区画整理事業が施行されており、今後人口増加の可能性のある地域であるとなりました。今後の開発の見込み、人口増の見込みなどについては、事務局いかがですか。

宮澤副課長 金田地区の区画整理事業の概要につきまして説明します。

パンフレットの航空写真をご覧いただきたいと思います。海岸線には漁港や船溜まり、内陸には水田等がみられ、これまでは水産業、農業を中心とした地域です。

区画整理事業は、東京湾アクアラインの着岸地として、千葉県の新しい玄関口ということで、多様なライフスタイルに応じた住宅地、多機能型の都市形成を目指して千葉県、木更津市、UR都市再生機構が一体となって行っています。

西地区については千葉県が平成10年度、東地区は都市再生機構が平成11年度にそれぞれ事業認可を受けて現在施工中です。

その後経済情勢の低迷などや諸条件の整備によりまして、事業の見直しということで、金田東地区は平成22年6月に、金田西地区は平成20年6月に事業計画の変更認可を受けました。

金田西地区は計画人口が約7千人、東地区は計画人口約1万2千5百人です。事業を実施しています。

進捗状況等ですが、金田西地区は都市計画道路の中野畑沢線の左端、小櫃川をわたるところに金木橋がありまして、その周辺の造成を中心に今工事を進めています。金田東地区は、現在西地区よりも若干工事が先行していきまして、平成25年度末の工事概成を目標に進めています。

その後換地処分などとなって、実際に建築物が建っていくと聞いています。

金田東地区のかなりの面積を占めている計画建設用地には、進出企業が現在5社決定しています。三井不動産のアウトレットの計画が、21.5ヘクタール、それ以外に食品小売業のベイシア、ホームセンターのカインズ、東京インテリア家具、更に医療法人の塩田病院が塩田病院木更津クリニックという仮の名称ですが開業すると聞いています。

金田西地区東地区を合わせますと、計画人口は1万9千5百人ということで、大雑把な言い方ですが、請西東と請西南、請西小学区が抱えている新市街地と同じかまたはそれ以上の計画人口を持った区画整理事業が進行しているという地区です。

佐伯会長 それでは、事務局の説明を踏まえて金田小学校について審議していきたいと思います。

現状と課題を確認しますと、教室は足りていて、敷地面積は十分、通学距離は学区全域が3.5キロメートル以内なので、国が定める条件の4キロメートル以内に収まっている。児童数は減少傾向と予想され、現在普通学級が6学級、小規模校です。

隣接校とのかかわりを見ますと、隣接校は岩根小学校だけです。

通学区域の変更、統廃合について、どうでしょうか。

事務局、シミュレーションの結果を説明してください。

浪久副課長 金田小学校と、隣接する岩根小学校を統合した場合、児童数は平成22年度522人から減少して、平成28年度で約2割減の424人となる見込みです。学級数についても、平成22年度の17学級から平成28年度で14学級となる見込みです。通学距離は、最長で5.6キロとなります。

内田委員 シミュレーションでは減少の見込みですが、さきほどの説明で、人口が約1万9千5百人増える、請西地区と同じくらいの街が金田地区にできる可能性があるということでした。そうすると、かなり増える傾向になって、金田小中学校を視察した感じでは、あの学校が手狭になって、また考慮しなければいけない状況になるのではないのでしょうか。

浪久副課長 今回のシミュレーションは、小規模校に対する方策である隣接校との統廃合について行ったものです。これ以外にも、外的な要因として区画整理事業等による人口増がありますので、それを踏まえて、ご協議いただければと思います。

佐伯会長 人口が請西地区と同様に増えると、金田小が逆に手狭になってしまうということについては、事務局どうですか。

宮澤副課長 現在金田小学校については耐震補強工事をしております。普通教室として使用できるものが、改修工事後9教室程度ということで、区画整理事業地内に住宅がはりついてきますと、特に就学前のお子さんを連れた世帯や、引越してからお子さんが生まれる世帯が木更津市内の区画整理事業地では大変多いので、まず小学校で児童数の増加が相当みられるのではないかと思います。そうなりますと、確かに手狭になってくるということになるかと思えます。

内田委員 施行期間をみると、西地区が31年まで、東地区が30年までということなので、市が重点的に行っているところについて、人口がはりつかないということ的前提にするのはどうかと考えます。人口がはりつくという考えで検討をと思えます。

佐伯会長 統廃合というよりは、人口増加という将来を見据えた考えでということですね。

石渡委員 この中には学校予定地は入っているのでしょうか

宮澤副課長 さきほどの地図をご覧くださいと思います。

金田西地区の右下に茶色く塗りました、敷と書かれた部分の、上にあるのが、現在の金田中学校が少し拡がるかたちで金田中学校用地として換地が予定されているところです。下にありますが、金田小学校の予定地として予定されている部分です。この区画整理事業で小中学校予定地については、人口増を考慮した児童数、クラス数に応じた敷地面積ということで換地処分されるという計画と聞いています。

佐伯会長 金田小学校は今は小規模校ではあるけれども、今後児童数の増加の可能

性は十分にあることから、現状維持ということになりますか。

青柳委員
佐伯会長

そういうことだと思います。

では続いて金田中学校を審議していきたいと思います。

現状と課題を確認しますと、教室は足りていて、敷地面積は十分、通学距離は学区全域が3.5キロメートル以内なので、国が定める条件の6キロメートル以内に収まっています。生徒数は今後数年増加傾向、その後減少が予想されるというのが現状です。学級数をみると、現在普通学級が3学級、小規模校です。小学校とのつながりは、金田小学校の児童が皆金田中学校に進学していますので、一つの小学校から一つの中学校へということは実現されています。

隣接校との関わりをみると、隣接校は岩根西中学校です。

通学区域の変更や、統廃合についてのシミュレーションを事務局お願いします。

浪久副課長 金田中学校と岩根西中学校を統合した場合、生徒数は平成22年度302人から減少し、平成28年度で約4割減の193人となる見込みです。学級数も、平成22年度の9学級から、平成34年度で6学級となる見込みです。

通学距離は、最長で5.4キロメートルとなります。

佐伯会長

ご意見をお願いします。

金田小学校と同様の考え方でいったほうが良いでしょうね。

石井委員

金田小学校、中学校とも現状においては減少傾向ですが、区画整理が完了して、人口がはりついてくると仮定した場合、人口増加がどんどん進んで、学校の土地は確保してあるけれども、建物を追加工事するとなったら、今のデータだと当分は必要ないということで現状維持の結果になりますが、何年か後には兆候が見えたら準備しなくてはいけないと思うのです。その場合、新築までに何年くらい必要なのでしょうか。

例えば南清小はもう足らなくなるのが何年か前から分かっているながら、なぜ新築にまでならないのかという話を保護者の方々から聞きます。真舟小学校のように学校用地があって、すぐにでも建てられる状況になっているところに、建てようという判断をしてから建つまでに何年くらいかかるのでしょうか。保護者の方からすると、何年我慢しなければいけないのかということの裏返しにもなってくると思うので。

宮澤副課長

開校までということで逆算しますと、校舎の工事におよそ1年、契約に2～3か月、設計に1年くらいかかると考えていますので、2年半から3年くらいは。なおかつその設計業務を委託するというところについて予算措置等がありますので、当初予算であれば更に半年くらい前から検討に入る必要があります。

佐伯会長

金田中学校につきましては今後生徒数の増加があって、今後適正規模に近づき、更に大きくなるかもしれないということで、現状維持となりますか。

石渡委員 将来的には、金田中が大きくなって、岩根西中のほうから金田中に行くという可能性があるでしょうか。

浪久副課長 現状ですと、岩根西中学校は生徒数の減少が見られますが、統廃合あるいは通学区域の変更を考えるときには岩根中学校との関係を考えるべきとの結論をいただいています。

佐伯会長 そうでしたね。では、金田中学校については現状維持ということで、次の中郷中学校区について審議したいと思います。

中郷小学校、中学校の沿革などについて、事務局で把握している範囲で説明してください。

浪久副課長 中郷地区は、明治6年に井尻小学校が開設されました。その後地区内で小学校の設置や統合があり、昭和22年、新学制施行によりまして、中郷村立中郷小学校となり、その際中郷小学校のなかに中郷中学校が併設されました。昭和30年、木更津市と中郷村の合併によりまして木更津市立中郷小学校及び中郷中学校となり、中学校は独立校舎へ移転しました。その後校舎や施設の整備拡充や様々な教育活動を経て、現在に至っています。

佐伯会長 中郷小学校について審議したいと思います。現状と課題を確認しますと、教室は足りていて、敷地面積は十分、通学距離は学区全域が4キロメートル以内なので、国が定める条件の中に収まっています。児童数は減少傾向と予想されます。学級数を見ますと、普通学級が6学級の小規模校です。隣接校は、事務局どこになりますか。

浪久副課長 高柳小学校、西清小学校、祇園小学校、東清小学校です。

佐伯会長 小規模校ですので、統廃合のシミュレーションをしてください。

浪久副課長 まず、高柳小学校と統合した場合、児童数は平成22年度595人から平成28年度の551人まで、596人から551人の間で推移する見込みです。学級数は18学級となります。通学距離は最長で6.7キロとなります。

東清小学校と統合した場合は、児童数は平成22年度169人から、減少して、平成28年度では約2割減の133人になる見込みです。学級数は6学級となります。通学距離は最長で4.8キロとなります。

西清小学校と統合した場合は、児童数は350人前後で推移する見込みです。学級数は平成22年度13学級、平成23年度以降は12学級となる見込みです。通学距離は最長で7.9キロとなります。

隣接校のうち祇園小学校については、現在大規模校ですので、更なる大規模化を招くためシミュレーションはしていません。

内田委員 中郷小学校は、児童数が減っていった28年度の入学児童は10名ということで、この地区は大規模な計画などはないことから、このまま推移してしまう感じがしますので、統廃合については考慮しなくてはいけないかなと思います。

高柳小学校については、岩根地区の審議のときに、地域性などを考慮して、将来的には岩根小と高柳小、岩根中と岩根西中の統合の可能性を考え

るということでしたので、それに更に中郷を加えるというのは無理があるのではないかと思います。

また、地形図を見ると中郷は東西に長くて南北に短いので、距離的なことを考えると、東西に長いところに統廃合となると難しいかなという感じがします。そうすると西清小学校はかなり距離があるので、統廃合は難しいのではないかと思います。

東清小学校は、距離的には一番問題がないと思うのですが、中間答申で東清小学校は児童数減の可能性があることから、南清小学校との統廃合をとという結論でしたし、中郷小学校と東清小学校が統合した後でもなおかつ減少傾向となるので、厳しいかと思えます。

そうすると、大規模校ですが祇園小学校との関わりで、現に十日市場や大寺の方で祇園小学校に通っているお子さんもいると思いますし、消去法でいくと可能性が残っているのはその辺かなというところを感じます。

川名委員 西清小との統合はないと思います。西清小学校は将来的に一中と三中に進学している児童をそれぞれ一小と祇園小へ統合という検討が必要、ただししばらくは様子を見ましようという答申をしましたよね。

それに、もし西清小学校と中郷小学校を統合して、将来一中に行かなければいけないとなるとすると遠すぎます。

東清小学校は、もう少し人数がいればよかったのですが。東清小と統合すると、将来は清川中で、距離的にも地域のバランスからみても悪くはないと思いますが、東清小と南清小を一緒にして考えると、すごく広い学区ですよね。

祇園小は大規模ですけれども、中郷小が将来的には一学年10人くらいしかいないとなると、一クラスに2人から3人くらいしか増えませんが、統合しても大きな影響はないと思います。しかし、一つの小学校から一つの中学校へ行くことを考えると、その子たちは将来三中に行くことになります。そうすると中郷地区の端の子はかなり遠いですよね。

中郷小をどうするかは、難しいと思います。落ち着くところがなかなか見つかりません。

石井委員 通学距離が6キロを越える地区が発生してしまった場合に、お子さん方の通学の方法は何かあるのでしょうか。

高澤参事 国の基準はおおむねということですが、確かに小学校の子どもには6キロが限度だと思います。学校によっては、馬來田小など自転車通学という子どももいますが、近隣の統廃合をしている市町村をみると、市が手当をして、スクールバスや路線バスの増便の活用というところが多いように思います。

石井委員 例えば中郷小学校を他の小学校に全部吸収するのではなくて、本当はあまり考えてはいけないのかもしれませんが、中郷地区を3つくらいに分けて、高柳小学校、祇園小学校、南清小学校に行くという選択肢もあるのでしょうか。あまり好ましくないとは思いますが。

- 川名委員 一番大事なのは学校と地域の関わりだと思うのです。
木更津の公民館と住民会議と学校の関係は非常に複雑で、どこに属してよいか分からない地域があったり、重なっていたりしています。
例えば、南清小学校は東清公民館の管轄なのだけれども、生活圏でいくと清見台公民館のほうが動きやすいといったことが起こったりしているのです。それを考えると、公民館なども意識して、将来的には公民館と小中学校の関係がうまく繋がるようなかたちでコミュニティができあがると、学校と地域の関係はもっと密接になっていくのではないかと思います。
非常に難しいですが、その辺の筋が通っていくと教育環境が整備されていくと思います。
現実問題として、中郷地区はどうなっているかということが分からないのですが、将来的なことを考えれば地域を涙を呑んで分けるというのも一つの方法かもしれません。地域に住む人は、分けるのは絶対に嫌だと思いますが、街づくりの全体的な構想のなかで理解してもらうほかないのだということであれば、方法を探るということもあるかもしれません。
- 青柳委員 あえてマイナスな意見を出しますが、やはり中郷の地域は今までいろいろと公民館や小中学校が一致団結して教育を盛り上げている地域だと思いますので、三つに分割するのは非常にショッキングなことではないかと思えますし、子どもの教育にとってもはたして良いことになるのかなと思えます。
先ほどの教育長のお話でも、これからは家庭教育や地域の教育を大事にしていかなければいけないということでした。最近の朝日新聞に、子どもたちは減っているけれども、心の面ではかなり崩壊する一途をたどっているという状況だとありましたから、私はあえて小規模校も場合によっては、必要に応じて残すということ考えていかなければいけないのではないかと思います。うまく合併できる場所があればよいのですが、ないところにおいては、今のままと維持していくことが教育としてよいのではないかなと。残すところは残してもよいのではないかと思います。えこひいきにも見えますが、いろいろと条件を考えたらうえであれば、それもあえて選ぶべきかなと思えます。
- 石渡委員 私は中郷中学校に勤務していたのですが、中郷は昔から教育村といわれていて、地域の教育熱が高い、地域で教育熱心なところなんです。現時点では小規模のモデル経営の学校として、特例として残してはと思います。
- 川名委員 幾つかに分けるとするのはやはり撤回します。金田小中のほうで考えていたのですが、どこかに一つくらい小中連携校、小中一貫校みたいなものがあったらいいかなと思っています。中高一貫校というのが一時注目されましたが、私はむしろ義務制の9年間を一つの体制でやってはどうかと思うのです。
安房の長狭学園が何年か前から小中一貫を始めました。その成果を聞いてはいないのですが、できれば一つの屋根の下で、9年間の継続した教育

に挑戦する地域があってもいいのではないかなど。そういう視点もひとつあってよい気がします。

石井委員 同じような内容ですが、私は鎌足小学校と中学校にいまして、同一敷地内に小学校と中学校がありました。そういった形が、小規模校には理想的なのかなと思います。同じ校庭や体育館を小学生と中学生が使っている、理想的に近かったかなという気が今でもします。

前回の視察でも、中郷中学校の教室の床がだいぶ傷んでいて、体育館にしてもそうですが早急に手が必要なのかなと思いますので、小学校と中学校と、公民館も一緒にして、学童保育的なものもそこでやれるというようなことも含めて、モデル校的なものをするには良いところなのかもしれないと思います。

佐伯会長 義務教育の一貫体制のような、将来の教育のことも視野に入れながら、今現在では、小規模校でもあえて残すという方法でよいのではないかなというところで、現状維持でよろしいでしょうか。

— 委員賛成 —

佐伯会長 では、中郷中学校のほうを審議していきたいと思います。

現状を確認しますと、教室は足りていて、敷地面積も十分、通学距離は学区全域が5キロメートル以内なので、国が定める条件の6キロメートル以内に収まっています。生徒数は増加傾向で、学級数は普通学級が3学級、小規模校です。小学校とのつながりは、中郷小学校の児童が皆中郷中学校へ進学していますので、一つの小学校から一つの中学校へということは実現されています。

隣接校としましては、岩根中学校、木更津第三中学校、清川中学校ということになります。小学校のところで、小中一貫教育といったおもしろい視点が出ましたが、まずは方策として、それぞれの学校との統廃合についてのシミュレーションをお願いします。

浪久副課長 中郷中学校と岩根中学校ですが、統合した場合平成22年度310人からいったん増加しますが、平成26年度から減少し、平成34年度は273人となる見込みです。学級数は10学級から9学級となります。通学距離は最長で6.7キロとなります。

次に中郷中学校と第三中学校を統合した場合ですが、このシミュレーションは中間答申の内容に合わせて、祇園小学校を全て第三中学校に進学させるということで行っています。生徒数は平成22年度368人からいったん増加して、平成26年度から減少し、平成34年度には360人となる見込みです。学級数は11学級から13学級となる見込みです。通学距離は最長で7.5キロとなります。

中郷中学校と清川中学校を統合した場合ですが、これも中間答申に合わせてシミュレーションを行っています。生徒数は平成22年度239人か

らいったん減少して、平成27年度から増加、平成34年度330人となる見込みです。学級数は6学級から10学級のあいだで推移する見込みです。通学距離は最長で5.7キロとなります。

佐伯会長 中郷中学校は、運動場が道路を隔ててあったところですね。視察の折に、あまりに人数が少ないので、部活がなかなかうまくいかないという話を聞いたことが印象に残っているのですが。

池田委員 この前の視察で感じたことなのではけれども、学校の周りの環境は良いのですが、グラウンドにしろ、何にしろかなり荒廃しているという現状でした。あれだけ良い場所ですから、もう少し環境を考えてあげたらよいのではないかと感じました。

人数は非常に少ないですから、確かに統合ということを考えなければいけないかもしれませんが、教育に非常に熱心なところで、小学校と中学校のつながりが非常に大きいという意味では、どうかと思います。

佐伯会長 人数を考えると統廃合ということも考えるけれども、非常に教育熱心な場所であることを考えると別の方法を検討できたらということですね。

金子委員 環境的には、非常に恵まれている場所だと思います。統廃合のことが入ってきますと、子どもたちの人数を考えるとそうになってしまうのかなと思うのですが、残したい気持ちがあります。

加藤委員 新市街地の適正な配置と、今回のような将来にわたって人口が増える見込みの少ない地区の適正配置をどうするかというのが、この審議会の大きなテーマではないかなと感じています。

金田地区の例はありますけれども、これから日本は基本的に人口減少時代に入っていくわけですので、その辺も考えなければいけないと思います。

さきほど小中一貫校の話がありましたが、私もそういう方法も一つあると思います。

それがないとするならば、中学校段階ですと、部活動や教育活動が活発になっていきますので、学区を取り払うことも子どもたちに行き届いた教育機会を与えるということで考える時期にきているのではないかと思います。

内田委員 さきほど川名委員から小中一貫教育というお話がありまして、教育の現場に立たれていての方の貴重なご意見だと思います。モデルケースとして、非常に良いなと思いました。

そうした場合には、中学校と小学校の学区は一つということになりますが、そのときに考えられるのは、中郷地区は田園地帯が広がっていて環境的には良いところなのですが、裏を返すと調整区域が多いということで、新たに家が建つ可能性がどうなのかなと。小中一貫教育、学童保育、公民館と、一つのエリアのなかでできれば、中郷小中学校区に来たいという方も出てくると思うのです。そういったときに今のままだと、もしかしたら家を建てられない可能性があるのではないかとと思うのですが、都市計画の面でどうなのでしょう。

鶴岡部長

今のご質問の件は、9月市議会で、いわゆる市街化調整地域に属する地域の人口流出、人口減少は目に余るものがある、将来的に限界集落という言葉さえ想定できるようなこともある、そのような中で市はどう考えてるのかというような質疑がありました。

10月1日号の広報で、市街化調整区域の土地利用方針案の策定にむけた説明会のお知らせをしています。都市計画行政のなかで、市街化調整区域も含めてどういうふうにしていくのかという考え方を都市整備部が取りまとめていて、今で言うと農家の跡取りや次男三男でない家が建てられないのですが、そうではなく、都市計画法のなかで利用計画を定めながら市街化調整区域を見直していく、集落の活性化に繋げていくという取組みが始まっています。今月から市内を4地区に分けて説明会をして、地域ごとにどういうふうにしていくのか、更に都市整備部のほうでは、要望によっては細かい区分けで説明をしていくということで、市街化調整区域だから絶対にダメだという前提ではない、新たな取組みです。中郷や富来田、鎌足など、地域の活性化の一つのきっかけになるのではないかと期待されています。

内田委員
高澤参事

それと抱き合わせで考えなければいけないことかなと思います。

小中一貫というお話が先ほどから出ていますが、小学校と中学校が連携をしながらという小中連携はすでにやっています。小中一貫教育になりますと、カリキュラムを全て変えていきますので、小学校6年間、中学校3年間の教育課程が、一般的には小学校4年生までで一つの教育、小学校5年6年と中学校1年生で一つの教育、中学2年3年で進路や就職を目指して一つの教育というパターンになります。施設も、同じ敷地、一緒の校舎の中で教育体制を組んでいる小中併設型と、校舎は離れているけれども一貫教育をする分離型など、色々な形がとれますが、教育課程も変わるといっても考えながら見ていくと、一般的に中学校の先生方の負担が多くなると言われていますので、メリット、デメリットの検証が必要です。

中郷中学校は、平成34年度になると35人で一つの中学校となる見込みです。メリットもあるでしょうけれども、部活動や教育課程を考えると、一つの中学校として成り立つかどうか、検証が必要だと思います。

青柳委員

大規模の学校はどんどん膨れるし、小さいところはどんどん小さくなるという悩みの解消の一つとして、自由な学校の選択というのが言われていることでもありましたので、学校で特色を持つように努力していただいて、中郷の良さを益々出していただくことによって、市内のなかでその学校を希望する子どもたちを柔軟に、学区にとらわれずに入れていくというものだと思います。それをやったがために大規模校に益々集中するということでは困りますけれども、小規模校のほうに来るような考え方を柔軟にしていっていかないとだと思います。

石井委員

昨年、袖ヶ浦の平岡小学校に幽谷分校があるという話をして、その時に木更津には規定に合致するところはないということでしたが、分校という

スタイルではなくても、中学校同士の連携を固めていって、部活だったら隣接の中学校と一緒にやるとか、そういった形の選択肢も見ていくとよいのではないかと思います。

佐伯会長 将来に向けては隣接する中学校との連携も考えていったらよいのではないかといいことですね。

《休 憩》

佐伯会長 中郷中学校については、クラブ活動等で隣接する学校と連携を考えていくというご意見でした。これについて、事務局現状はどうですか。

高澤参事 学校間で連携を図るといえるのは、ないことはないです。例えば特別支援学級等で、行事を年間に幾つか合同でやることがあります。それから部活動等で、隣接の学校と急遽合同チームを組んで大会に参加するという事もないわけではありません。ただこれは日常的なことではなく、臨時的に人数が足りないのでチームを組んで、大会の運営委員会に協議を図って認めてもらうというケースがあるということです。日常的に部活動と一緒にやったりというのは、これはあまり好ましくないかもしれません。別々の学校が一緒に練習時間を組むというのは、遠方から来ている子は早く帰らなければならないということも出てきます。

色々な連携はできると思いますけれども、部活動等は学校教育の中では二次的なものですので、あくまでも学習効果をあげるということを中心に考えていくことが大切だと思います。

モデル地区的にということを検証していくというのも一つの方法かもしれませんが、難しい面が出てくるものと思われまます。

佐伯会長 そうしますと、やはり隣接である清川中学との統合を視野に入れるという方向もありなんでしょうか。

川名委員 あると思いますね。

山口委員 確かに、原則的には市としては統廃合はしていかなければならないと思います。

今生徒数によって機械的に統廃合の議論をするとなると、やはり学校の存在意義は地域にとっては非常に高いわけですから。学校と地域が一体となっていて、学校があるからこそ地域がまとまっているというケースが、特に田舎の学校というのは強いのではないかと思います。

そういうなかで、中郷中は将来35名と非常に少なくなりますけれども、もう少し地域での存在、地域性を考慮に入れて判断してはと思います。

もう一つ、特に少ない学校の教育効果、メリットデメリットはどうなのでしょう。人数がここまでいってしまうとデメリットが多いので、統廃合を考えなければならぬとか、その辺が大事ではないかと思うのですが。

高澤参事 教育委員会としてはっきり検証したわけではありませんが、一般的には、

クラスの中では比較的人数が少ないほうが、例えば1学級が40人であるよりは、30人とかであるほうが、学習効果が高いのは事実かもしれません。

学校での子どもたちをめぐる環境を見たときには、部活動の件であったり、多くの子どもたちと接するなかで生き方や人間性を知ったりとか、学校行事を組むうえでの取扱いとか、そういった面では、少人数よりはある程度的人数を抱えていたほうがメリットが大きいのも事実だと思っています。

山口委員 地域の方々が、何とかして学校を存続させようといろんな努力をしています。その辺を十分加味しなければと思います。

佐伯会長 中郷中については両面からの意見が出ています。非常に教育的に熱心な地域であって環境も良いけれども、特段人数の少ない学校で、小中一貫やクラブ活動の連携などの工夫をできないかといったときには難しい。こういったことを踏まえて、持ち帰って、次回の審議のときにもう一度審議をするということにしたいと思いますがいかがですか。

— 委員賛成 —

佐伯会長 それでは、鎌足中学校区の審議に進みます。

鎌足小中学校の沿革などについて、事務局で把握している範囲で説明してください。

浪久副課長 鎌足地区については、明治6年矢那小学校が設立され、明治22年、矢那村と草敷村が合併し鎌足村となったことから、鎌足村立鎌足小学校に改称、昭和22年、新学制施行によりまして鎌足村立鎌足小学校となり、併せて小学校内に鎌足中学校が併設されました。昭和23年、中学校が小学校の校舎から移転して独立校舎となり、昭和29年、木更津市と鎌足村が合併して木更津市立鎌足小学校及び中学校となりました。その後校舎や施設の整備拡充や、教育活動を経て現在に至っております。

佐伯会長 では小学校のほうから審議をしていきたいと思っています。

鎌足小学校の現状と課題を確認しますと、教室は足りていて、敷地面積は十分、通学距離は一部片道4キロメートルを越える地域がある。児童は減少傾向で、学級数は普通学級が6学級の小規模校です。

隣接校は、南清小、請西小、清見台小、波岡小、八幡台小、富岡小です。

それぞれの学校との統廃合についてはどうでしょうか。事務局シミュレーション結果を説明してください。

浪久副課長 隣接校のうち、請西小学校、清見台小学校は大規模校ですので、シミュレーションはしていません。

まず、南清小学校と統合した場合、児童数は平成22年度325人から増加しまして、平成28年度は約8割増の597人になる見込みです。学級数は13学級から18学級となります。通学距離は、最長で9.2キロ

となります。

波岡小学校と統合した場合、児童数は平成22年度462人から減少して、平成28年度では約2割減の346人になる見込みです。学級数は17学級から12学級となります。通学距離は最長で1.1キロとなります。

次に八幡台小学校と統合した場合、児童数は平成22年度609人から増加しまして、平成28年度で約2割増の731人になる見込みです。学級数は20学級から23学級となります。通学距離は最長で8キロとなります。

富岡小学校と統合した場合、児童数は平成22年度158人から減少しまして、平成28年度では約2割減の120人になる見込みです。学級数は7学級から6学級となります。通学距離は最長で9.7キロとなります。

佐伯会長
石井委員

隣接する小学校は多いけれども、とにかく遠いということですね。

統廃合については、山の中なので、どちらに行くしても山を越えていくかたちになります。小学校や中学校で危険な場所が分かるマップを作りましょうという話をしたら、安全な場所が一つもないということになったのです。通学路自体が、山の中の細い電気がないようなところを通っていかなければならない、そういった観点からやはり統合は難しいかなと思います。

個人的には大規模校の隣接地ですし、建物も比較的新しいので、そういう方からの人を迎えるのが早道かなと思っています。実際に自分の住んでいるところの学校に通えないような事情のお子さんが鎌足小学校や中学校に来ているという例もありますので、そういう点を進めていただくのがよいのかなと思います。

佐伯会長

小規模校であるものの、通学距離や、通学路のことを考えると、現状維持ということになりますか。

青柳委員

中郷と同じように教育熱心なところですよ。地域を挙げて協力している体制ですし、学校環境もすばらしく良いところなので、ぜひ残したい気持ちがあります。やむを得ず統合を考えるなら中学、ギリギリのところですよ。

金子委員

結論的には私も同じです。先ほどの中郷もそうだと思うのですが、行政区も地域も、学校、公民館のエリアも鎌足地区は一致しているところで、公民館のほうで関わっているのですが、中郷公民館も鎌足公民館も地域の皆さん、小中学校の皆さんあわせて活発な取組をしていて、市街地の公民館に負けない活動、熱い思いのあるところですよ。

最終的には教育効果ということになると思いますが、鎌足小の場合は、隣接しているところへは8キロ9キロということで、小学生となるととにかく一山越えなければいけない、距離もあるし、難しいのかなと。地域のまとまりも考えれば、ぜひ存続のほうだと思います。

青柳委員

私は富来田地区に住んでいまして、そちらが平成6年から現在までに人口が千人くらい減っているという資料が手に入りましたので、全国的にそういうことであるし、鎌足でも中郷でも、どこでも人口減少でしょうし、

これはやはりやむを得ず合併、統合という話をどんどん持っていかなければ、現在の状況には合わないのではないかと感じていました。

けれども、木更津の現在おかれている状況としては、金田地区も随分人口がはりつく予想があるし、新日鐵の事務所も入ってくるとか、良い話がいまいろいろと聞ける状況ですので、まだまだこれから先人口が全体として社会増が続くようであれば、できるだけ鎌足とか中郷といった農村地域が荒廃しないようにうまく考えてもらいたいと思います。木更津市全体として発展する方向であるならば、小学校は残してもよいのかなと考えます。

佐伯会長 鎌足小学校は残すということで、よろしいですか。

— 委員賛成 —

佐伯会長 では鎌足中学校の審議に入ります。

現状と課題を確認しますと、教室は足りていて、敷地面積は十分、通学距離は学区全域が4.5キロメートル以内なので、国が定める条件に収まっています。生徒数は横ばいと予想され、学級数は普通学級が3学級の小規模校です。小学校とのつながりは、鎌足小の児童が皆鎌足中に進学していますので、一つの小学校から一つの中学校へということは実現されています。

隣接校としては、木更津第二中学校、太田中学校、波岡中学校、清川中学校、富来田中学校があります。

統廃合を考えた場合について、シミュレーションをお願いします。

浪久副課長 まず、木更津第二中学校と統合した場合、生徒数は平成22年度519人から、平成34年度では約2割増の611人になる見込みです。学級数は15学級から18学級となります。通学距離は最長で9.6キロとなります。

次に太田中学校と統合した場合、生徒数は平成22年度571人から、平成28年度654人まで増加をしまして、以後減少傾向となり、平成34年度には549人になる見込みです。学級数は17学級から19学級となります。通学距離は最長で9.1キロです。

次に波岡中学校と統合した場合、生徒数は平成22年度299人から増加し、平成34年度では約4割強の415人になる見込みです。学級数は9学級から13学級となります。通学距離は最長で10.1キロです。

清川中学校と統合した場合については、中間答申に合わせたかたちでのシミュレーションです。生徒数は平成22年度237人から、平成26年度まで減少傾向、その後増加に転じて、平成34年度では約4割強の335人になる見込みです。学級数は8学級から11学級となります。通学距離は最長で10キロです。

最後に富来田中学校と統合した場合、生徒数は平成22年度254人から減少し、平成34年度では半減の115人になる見込みです。学級数は

8学級から5学級となります。通学距離は最長で14.1キロです。

佐伯会長 何かご意見ありますか。

石井委員 鎌足中が統廃合となると、三中にプールがないということで、鎌足中と中郷中のプールを使うと聞いていますが、そういう話も他に振るといふことになるのですか。

石井次長 プールにつきましては、今年度それぞれに影響のない学校ということで中郷中と鎌足中のプールを使わせていただいたということで、この使用方法が来年度以降も続いていくかということについては、まだ決定していません。

石井委員 鎌足中に限らず、今住民会議が中学校区単位で動いていると思うのですが、中学校が統廃合になった場合、住民会議の組織も統廃合になってしまうのでしょうか。

石井次長 住民会議は、現在のところ中学校区ごとに組織しています。岩根の例をとりますと、今はそれぞれ東と西に中学校がありますので、それぞれに住民会議を設立をしました。統廃合で2が1に減ったというかたちになれば、当然新しい形のなかでの住民会議の運営となります。

佐伯会長 坂井委員何かご意見ありますか。

坂井委員 これから小学校中学校に上がる子がいたらどうかと考えると、いろいろな価値観を知ったうえで、自分で選び取っていくとか、相手の価値観を認めていくということ、小さいうちは無理かもしれないけれども、中学校時代に学んでおくべきだと思えます。中学時代3年間は本当に大切な時期だと思えます。今までずっと親の言う通りにしてきた子が、他の子を見て自分と違うということを見つけて、いろんな価値観があるんだということが分かってという、とても大事な時期だと思えます。

自分の住んでいる地域のなかでの自分の役割というものが分かる人間にしていくことが必要な気がします。それをするには、ある程度のところ、例えば小学校までは鎌足小学校だけでも、中学にあがるときには、他の小学校の子たちと一緒にするというのが、いくらか必要ではないかと思えます。ただそれを考えると、どこの中学校に通わせてあげても遠いから、どうしたらよいのかなと。

どういう人間性を育てるかというところから出発していかないとだめかなと思うのですが。学校教育だけではなくて社会教育との連携、学校、地域、家庭の連携と言われていますが、もう一度そういったところを考えていくことも必要かなと思えます。

石渡委員 中学校に入って新しい仲間と交わるということですが、今はほとんどの子が高等学校に行っていますので、そういう機会は上に行ってもあると思えます。やはり今ふるさとが忘れられていますから、小中でしっかりと地域に根ざした生活をして、高等学校に巣立っていくという考え方もあると思えます。

教育効果を考えると、一日の児童生徒の時間が、通学時間にかなり割か

れるというのは良くないのではないかと思います。

学習に重きを置いたり、人間関係を築いていくためには、学校にいる時間ができるだけ確保されることが必要だと思いますので、統合には遠すぎるのではないかと考えます。

内田委員 皆様のご意見はそれぞれごもっともだと思います。自分はどうか考えるかと随分悩んでいたのですが、中郷地区と鎌足地区は、学区の広さに違いはありますが、ほぼ似たような状況だと思います。中郷中学校については、もう少し情報を集めて、次回に繰越しということになりましたので、鎌足中学校も、少し考える時間が欲しいかなという気がします。

事務局にお願いしたいのですが、木更津ではそういった例はまだありませんけれども、君津とか、廃校になった学校も多いなかで、それによってどのような影響を受けたかといった情報を集めていただければと思います。

佐伯会長 委員さん方にご賛同いただければ、似たような状況ですので、中郷中学校と併せて、鎌足中学校も次回に継続して審議したいと思いますがいかがでしょうか。

加藤委員 関連で。次回また話し合えるという前提でお願いしたいのですが、先ほど石井委員から大規模校から小規模校へ子どもたちをとという話がありました。実際に今そういう方がいらっしゃるということでしたが、多いところから少ないところに来てもらうというというのは新しい考えですので、参考のために、今現在鎌足地区以外の子どもたちがどのくらい在籍しているのかという資料もいただければと思います。

佐伯会長 事務局資料をよろしくお願いします。では中郷中、鎌足中は継続としたいと思います。

長時間にわたりましてご審議ありがとうございました。

次回は11月8日、1時半からを予定しています。

よろしくお願いします。

以上をもちまして、第9回木更津市立小中学校適正規模等審議会を終了します。

上記会議録を証するため下記署名する。

平成22年11月1日

木更津市立小中学校適正規模等審議会会長

《会長署名》